

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 若い世代の動向

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉戸, 清樹 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002895">https://doi.org/10.15084/00002895</a>

## 4. 若い世代の動向

言語行動研究部第一研究室  
杉戸 清樹

### 1. 発表の趣旨

- (1) 今回行った高校生調査の結果から、現在の北海道各地における若い世代の方言使用と共通語化の実態を概観すること。
- (2) あわせて前回調査の一環として当時の高校生を対象にして行われた北海道内部の地域差の調査と対照し、この29年間の若い世代の言語変化を把握すること。

### 2. 前回の「高校調査」の概要

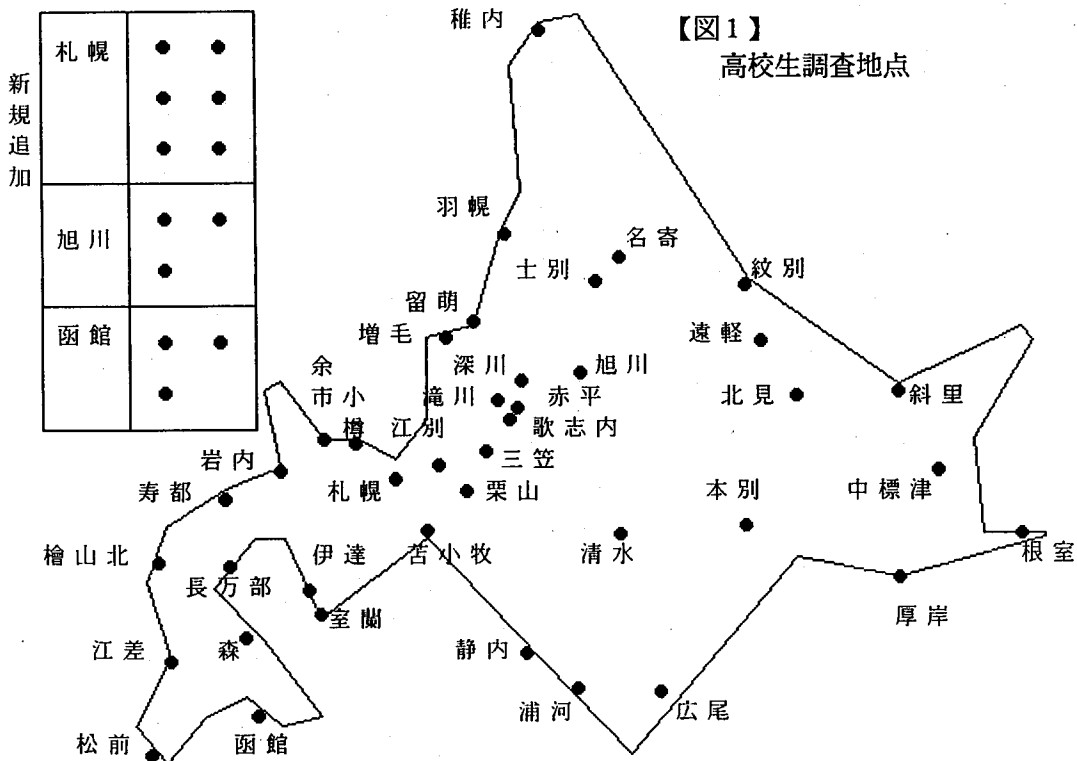
- (1) 時期 1960年 8～9月
- (2) 目的 その前年に実施した都市（札幌・帯広・釧路）と集団移住地（富良野町・新十津川町・豊頃村・浦臼村）での各種の調査からは、
  - ①移住3世という若い世代はすでにかんがりの程度「北海道共通語化」が進んでいること
  - ②そのような若い世代のことばにも地域差があることが把握された。これを、もっと多くの地点において調べること。
- (3) 対象 全道的なちらばりで選んだ40の高等学校の生徒、各学校 5人程度、総計 210人（男子123、女子87）。  
条件：本人はその土地で生まれ、よそに出たことがない。  
両親は北海道生まれ。  
父方の祖父が内地出身者で言語形成期を過ぎてから渡道。
- (4) 調査法 調査紙による個別面接。
- (5) 調査者 五十嵐三郎（北海道大学）・佐藤誠・長谷川清喜（以上、北海道学芸大）・石垣福雄（札幌北高）・柴田武・野元菊雄・上村幸雄・徳川宗賢（以上、国立国語研究所）

### 3. 今回の高校生調査の概要

- (1) 時期 1989年 3月～4月
- (2) 目的 上述（1. 発表の趣旨）
- (3) 対象 前回の高校調査の対象校（40）、及び大都市への人口集中に配慮して追加した札幌（6校）、旭川（3校）、函館（3校）の12校、計52校。各学校の1年生（1988年度現在）約50人。  
回答総数 2,682人（男子 1,304 女子 1,378）。  
条件：前回調査のように本人・家族の出身地は限定していない。
- (4) 調査法 回答者自記式のアンケート。回答は、原則的に選択肢によりマーク・シートに記入し、選択肢以外の回答は別の用紙に自由記入。

#### 4. 調査項目

- (1) 前回調査の語彙と文法の項目から計54項目。  
 前回の全68項目のうち、前回調査の段階ですでにほとんど共通語化の進んでいた項目「蛙」「蜘蛛」「氷」「眉毛」「しもやけ」「勉強する」などを除いた。「じゃがいも」「鮭」「とうもろこし」「キャベツ」「寒い」「書かない」「ペンが書きやすい」「書くだらう」「書くなら」「早く起きる」など。
- (2) 調査当時、北海道方言として話題になっていた語彙・文法の新規 5項目  
 「私たち」(ワタシガタ), 「丁寧・律義な」(マテナ)  
 「とても」(タイシタ), 「行くでしょう」(イククシヨ)  
 「さようなら」(シタツケ) など。
- (3) 全国的な分布の観点から注目される語彙項目, 新規11項目。  
 「七日」「舌」「ものもらい」「餅米」「おそろしい」など。
- (4) その他, 言語意識, 方言意識, 回答者の学年, 性, 現住地, 転居歴, 家族の出身地など。
- (5) 前回調査では発音・アクセントの項目も調査されたが, 今回は調査方法をアンケート式にしたため割愛した。



5. 方言使用状況の分布と変化 —— いくつかの類型

調査結果から項目ごとの方言使用状況の分布を全道的な視野で検討してみると、多くの項目において前回調査と今回調査の間に差異が指摘され、分布とその変化のすがたを次のような類型にまとめることができる。

【表1】

〔前回調査 1960〕	〔今回調査 1989〕	〔項目例〕
A. 全道的に使っていた	A 1. 全道的に今もよく使う	シバレル (寒い) 書カサラナイ
	A 2. 全般に減ったがなお全道的に使う	来イバ スレ ベ (勧誘・推量)
	A 3. 地域的な分布が見られるようになった A 3 1. 道央分布型 A 3 2. 半島分布型	デレキ 起キレ
	A 4. 全道的にほぼ消えた	カイベツ
B. 渡島半島や海岸地域に分布が見られた	B 1. 全道にわたって使用域が指摘できる	学校セ行ク 書クニイー
	B 2. 半島や海岸での分布がなお見られる	キビ 書クダラ アメユキ エント
	B 3. 半島部や海岸部でも使われなくなった	シガ ストフ
C. 渡島半島 (海岸) を除く地域に分布していた	C 1. 海岸部を中心に分布がある	アキアジ
	C 2. 全道的に減った	ゴショイモ
D. [調査せず]	D 1. 全道にわたって使われている	行クショ 私ガタ ジャガ芋 マテナ
	D 2. 地域的な分布が見られる D 2 1. 道央分布型 D 2 2. やや半島分布型	シタツケ タイシタ

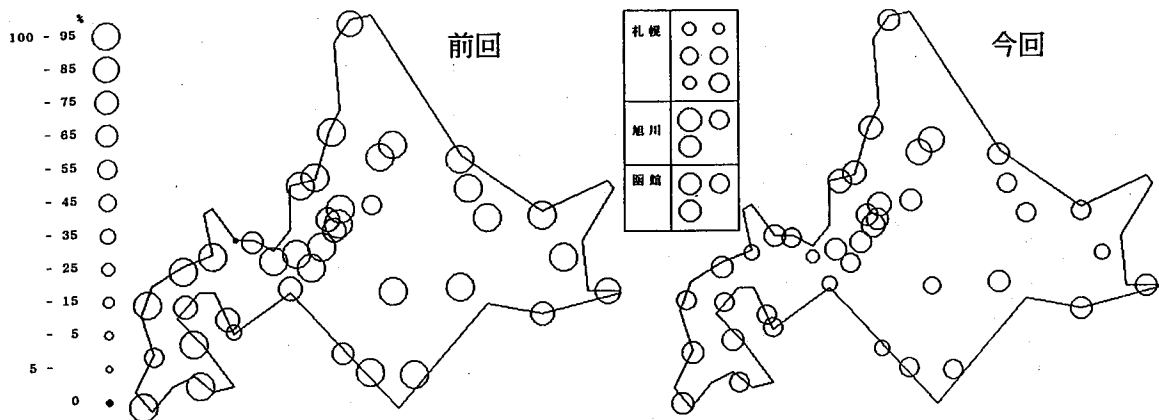


図2 【A1】<寒い>を「シバレル」と言う

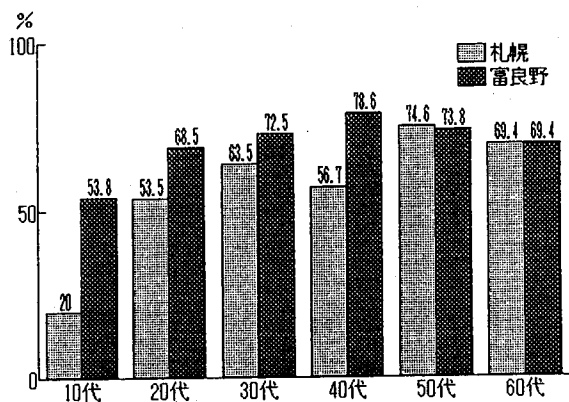


図3 【参考】年上の世代でシバレルと言う割合

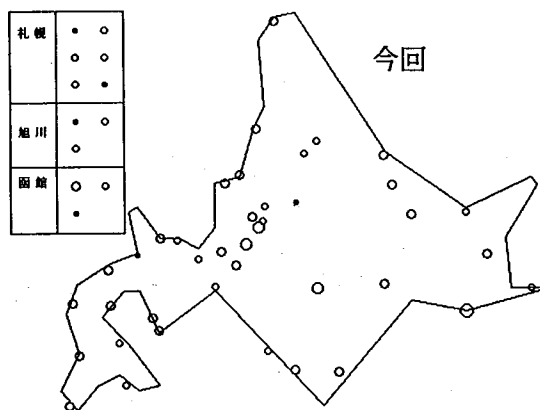


図4 【参考】<池の氷が>シバレルと言うか

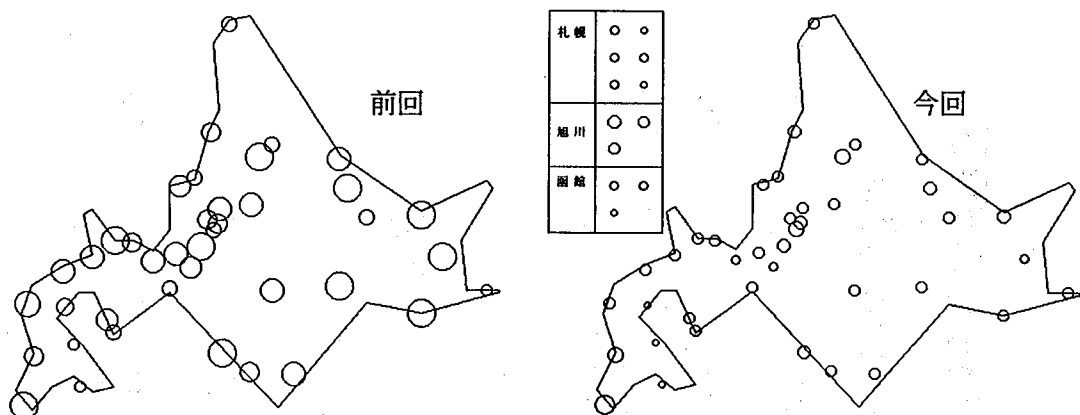


図5 【A2】「早く来ればいいのに」を「早くコイバいい」と言うか

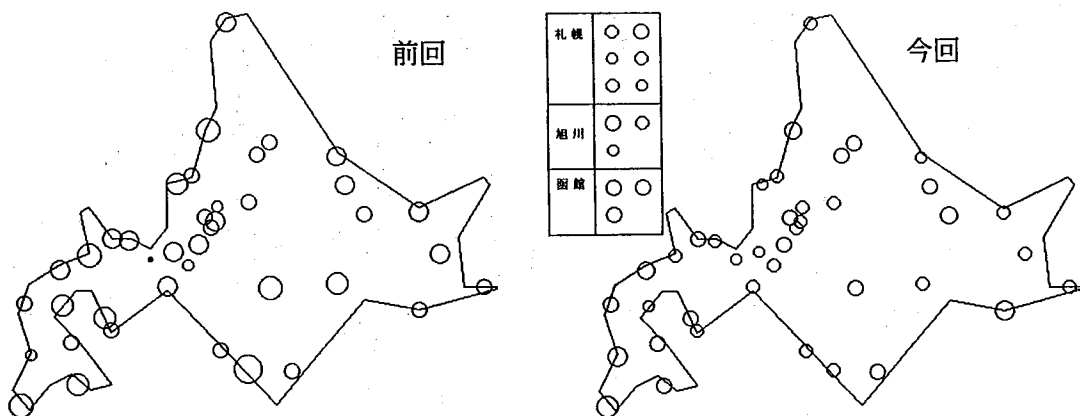


図6 【A2】 友達を誘うときに「一緒に行くべ」と言うか

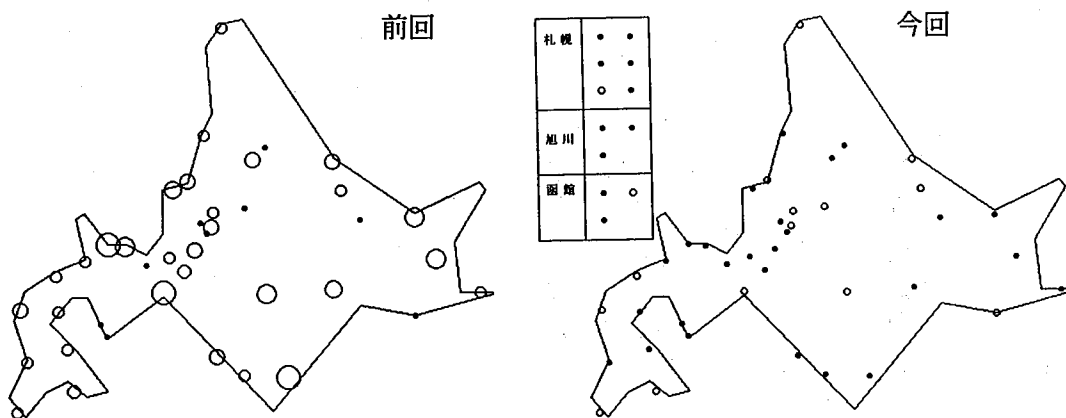


図7 【A4】 <キャベツ>を「カイベツ」と言うか

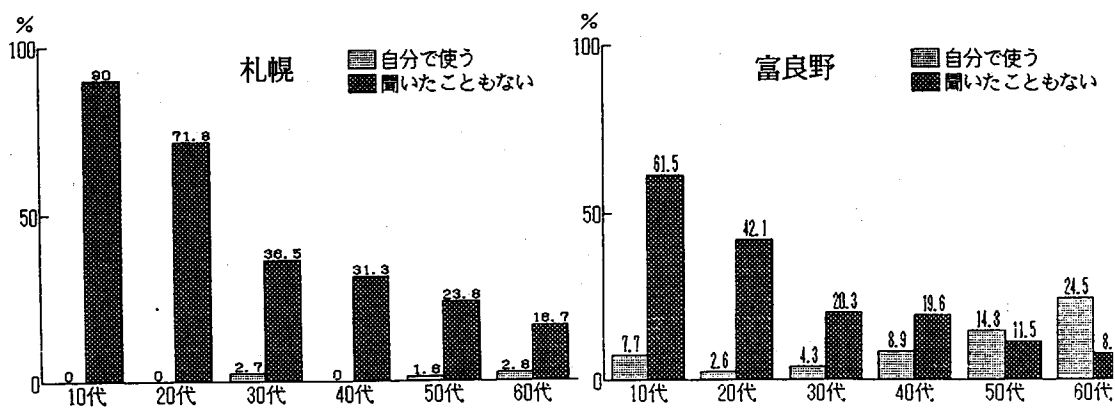


図8 【参考】「カイベツ」を聞いたことはあるか。また、上の世代は？

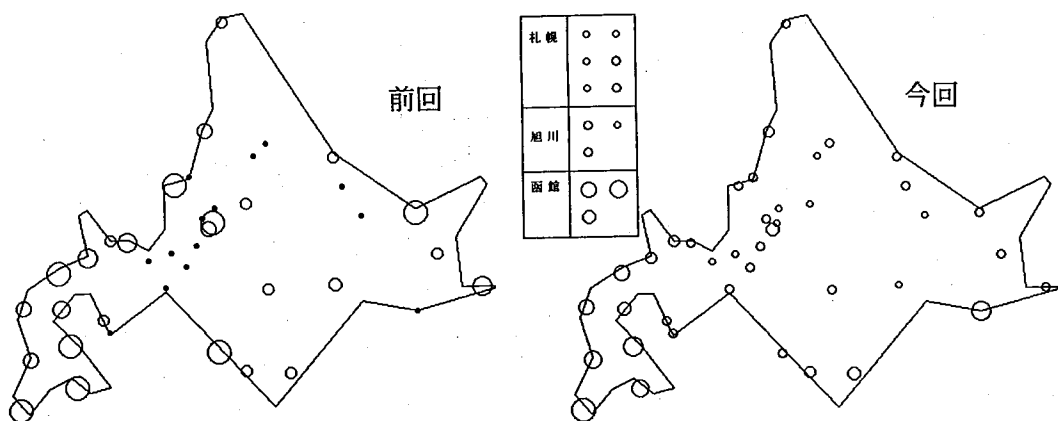


図9 【B1】「学校セ行く」と言うか

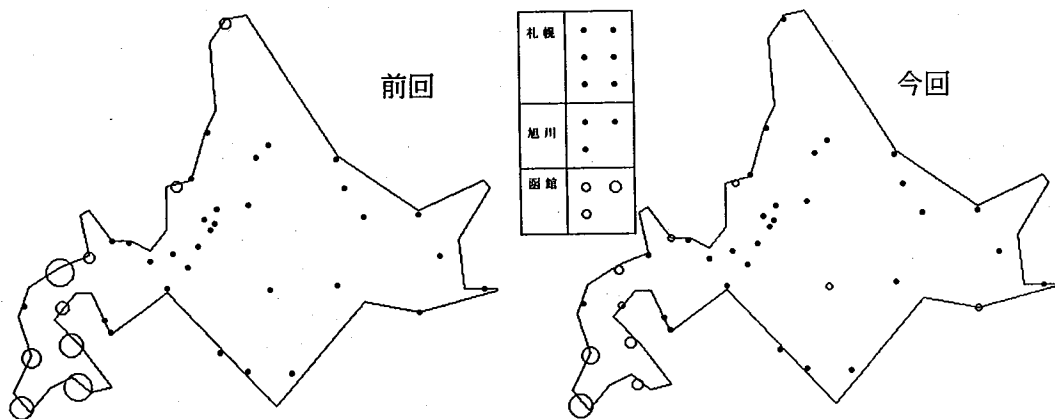


図10 【B2】<とうもろこし>を「キビ〜キミ」と言うか

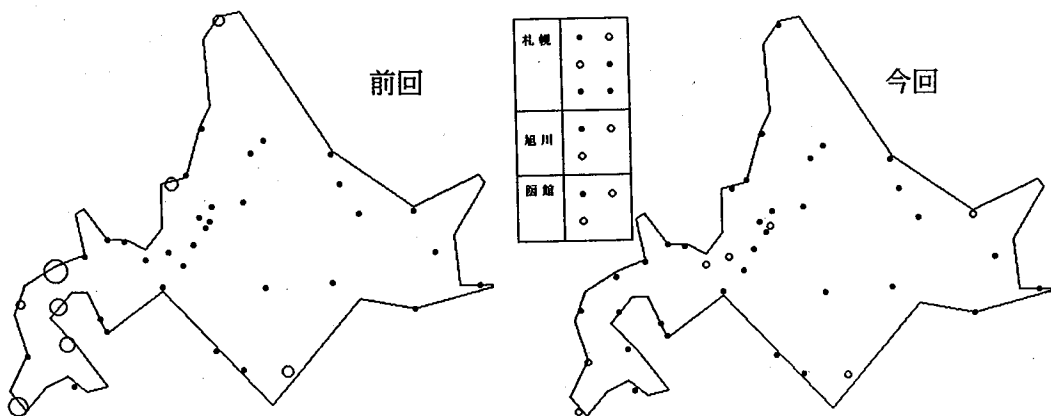


図11 【B3】<つらら>を「シガ〜スガ」と言うか

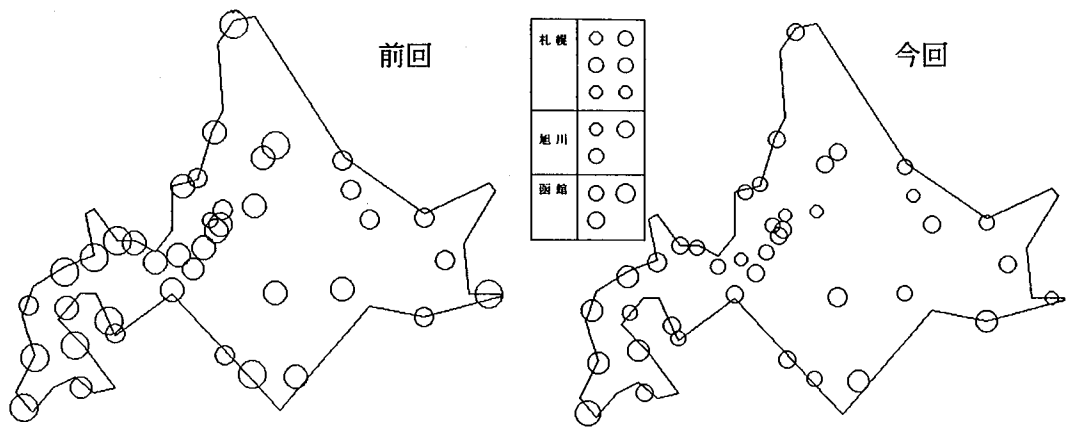


図12 【A32】 命令の意味で「早く起キレ」と言うか

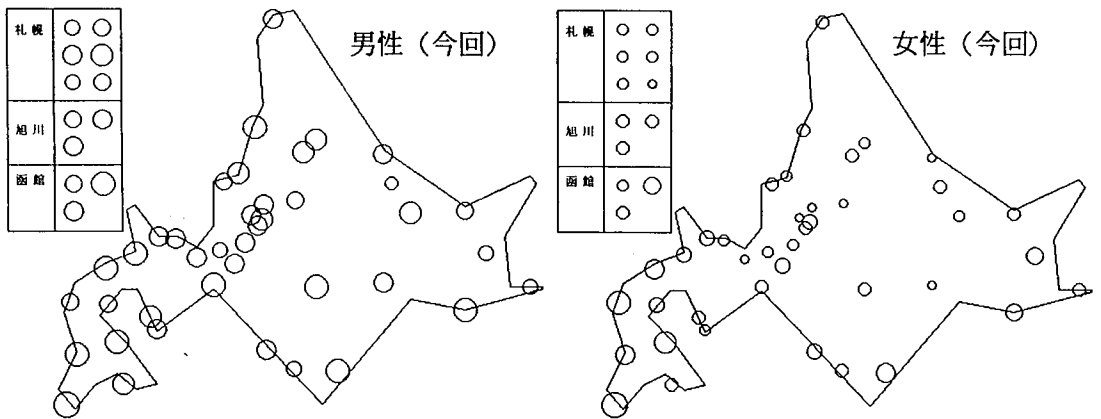


図13 【参考】 分布の男女差 (命令の起キレ)

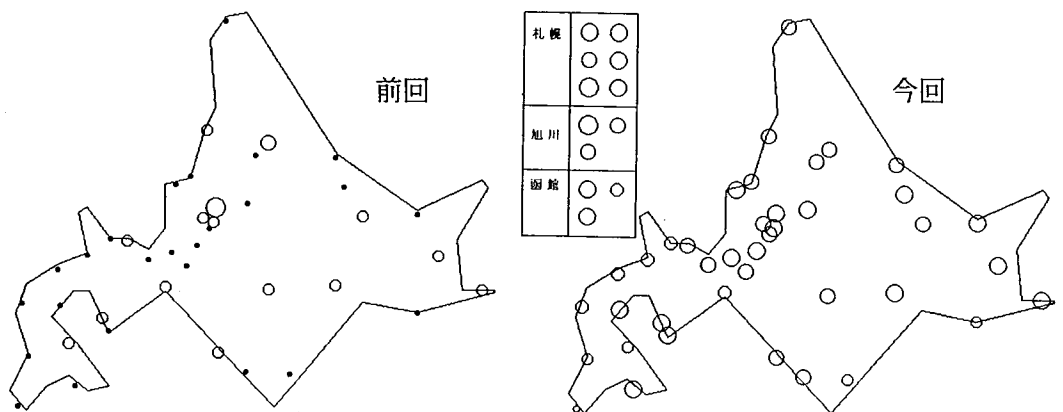
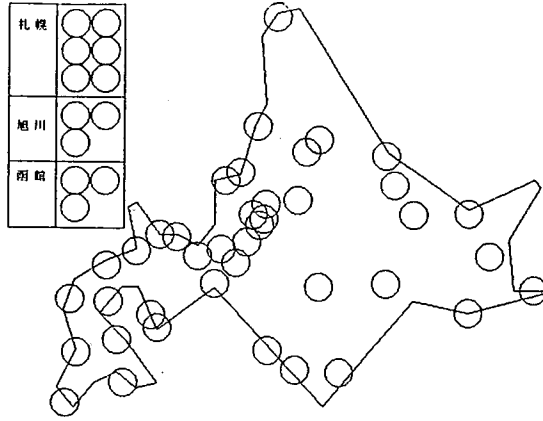


図14 【参考・D1型】 「起キレ」と言わず「起キロ」と言う

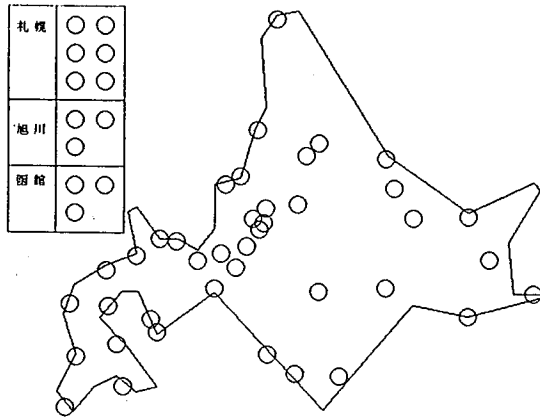


#### 4. 若い世代の動向

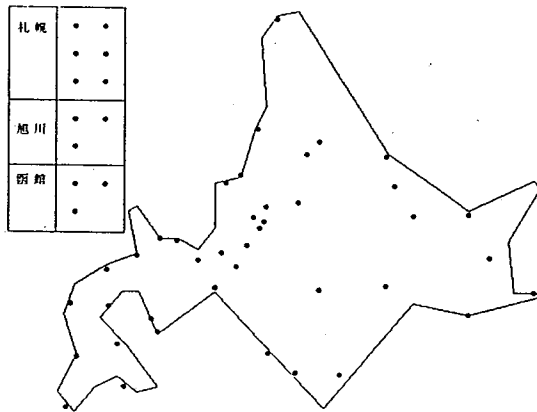
補助資料  
 国立国語研究所研究発表会  
 1991.3.27. 杉戸清樹



☒15 サンプル 全部が100%だったら



☒16 サンプル 全部が50%だったら



☒17 サンプル 全部が0%だったら

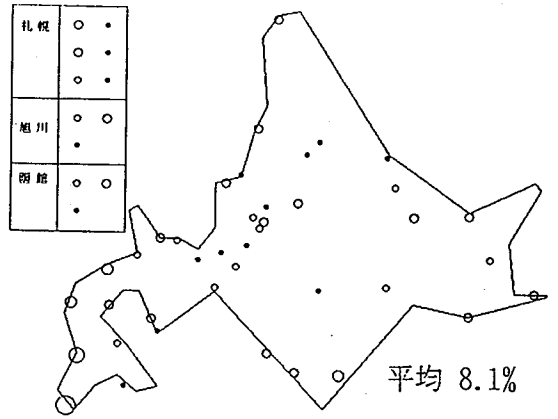
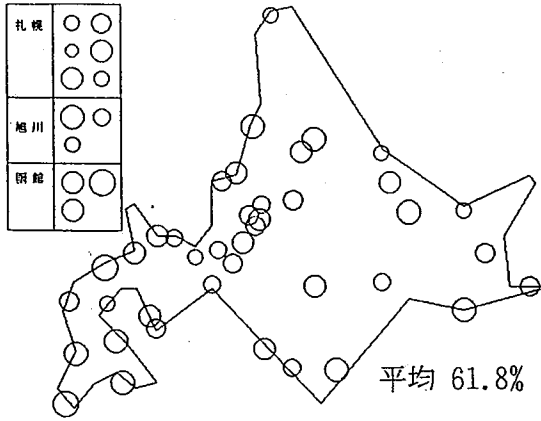


図18 勧誘の「行クベ」 男子（今回） 図19 勧誘の「行クベ」 女子（今回）

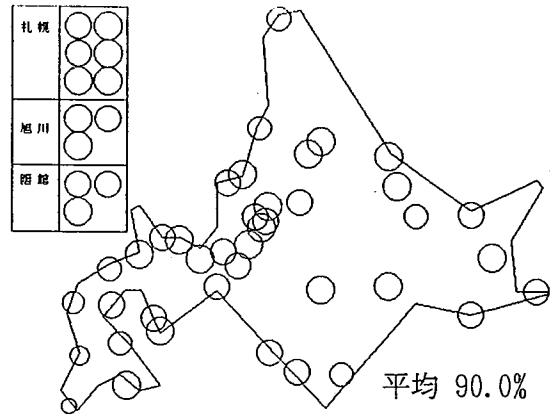
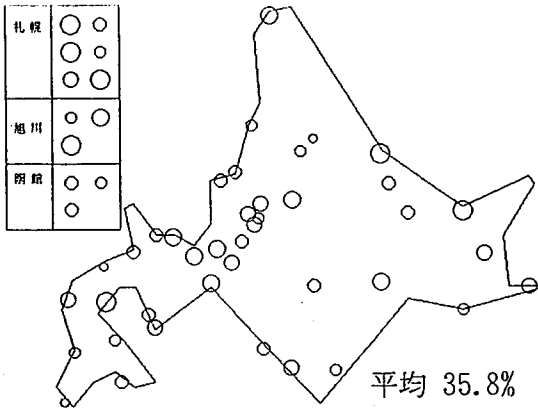


図20 勧誘の「行コウ」 男子（今回） 図21 勧誘の「行コウ」 女子（今回）

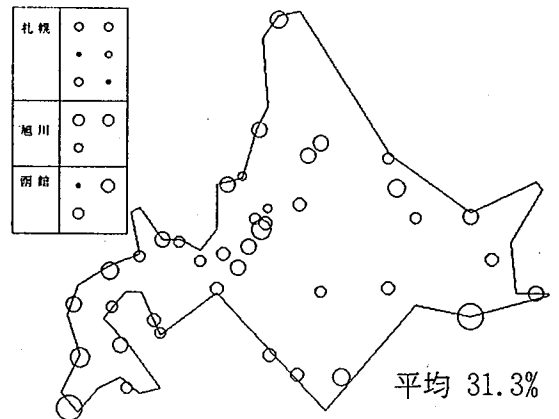
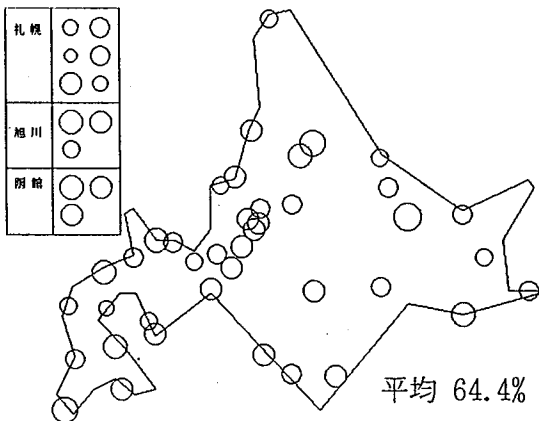
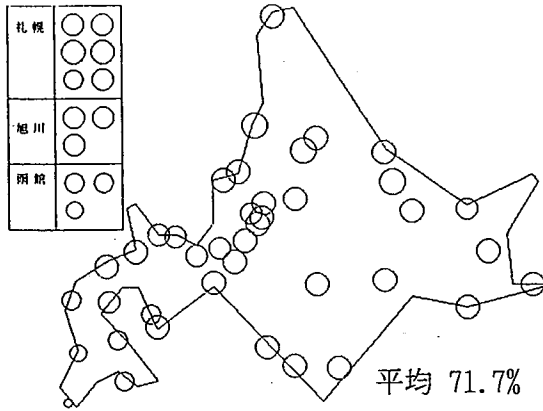
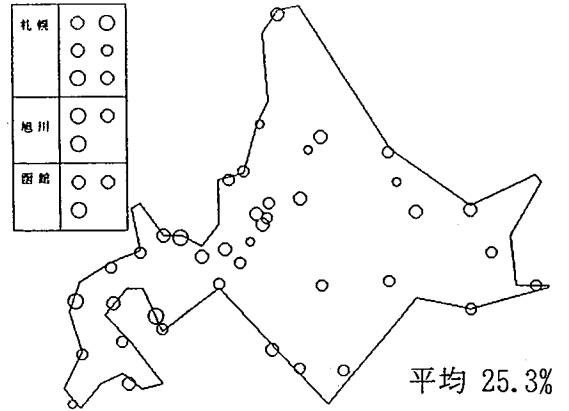


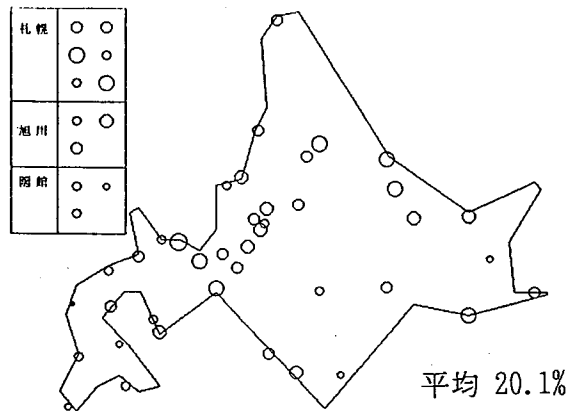
図22 推量の「書クベ」 男子（今回） 図23 推量の「書クベ」 女子（今回）



☒24 トウキビと言う (今回)



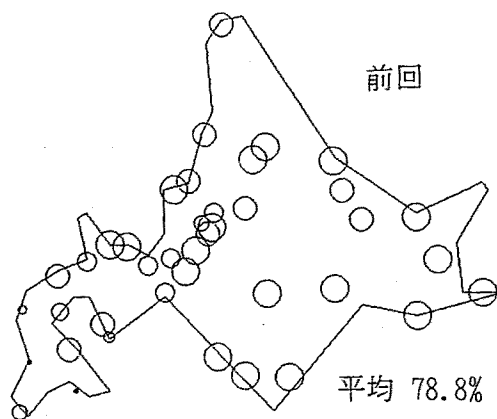
☒25 トウモロコシと言う (今回)



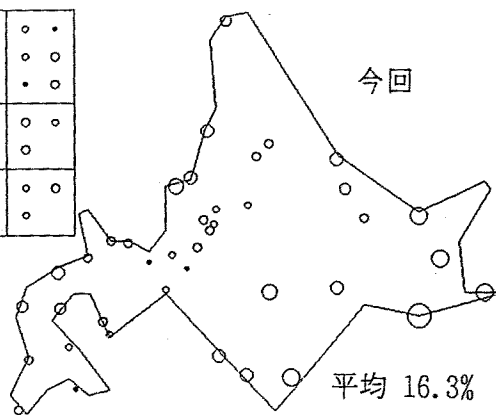
☒26 命令「早く起キナ」女子 (今回)

【まとめ】

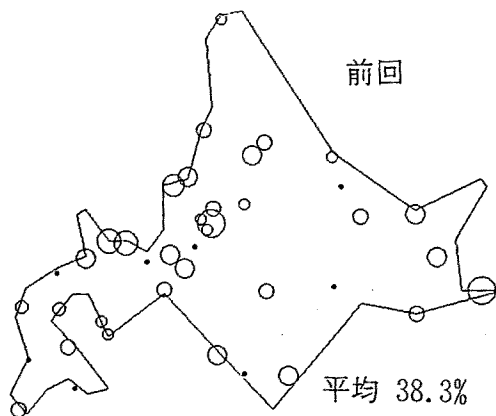
1. 全体としてみれば、この30年間に、北海道全体にわたって、若い世代において方言の共通語化が進んだことはたしかである。
2. しかし、その共通語化の動きは、一律で平板なものではなく、大都市とそれ以外、あるいは半島部・海岸部とそれ以外など地理的・社会的な片寄り、また話し手の性別による片寄り、などがからみあったものである。関与する言語形式も全国共通語、北海道共通語、方言など多様である。
3. そうした状況も含めて、いまなお、北海道の若い世代においては方言と共通語のほりあい関係、あるいは共通語化は進行中であり、今後ともその実態を追跡して行く必要性は高い。



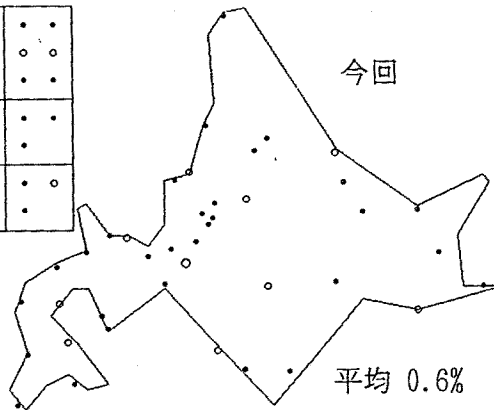
札幌	○ ○ ○
旭川	○ ○ ○
函館	○ ○



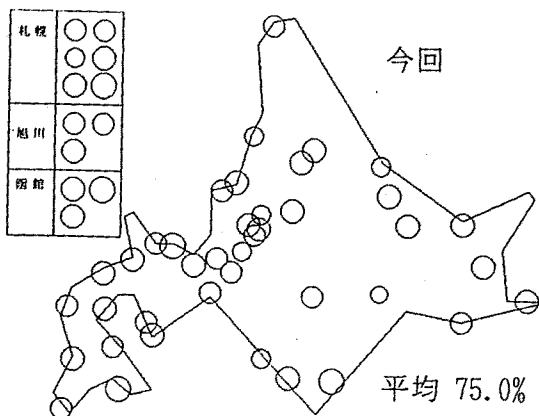
☒27 【C1】 鮭を「アキアジ」と言う



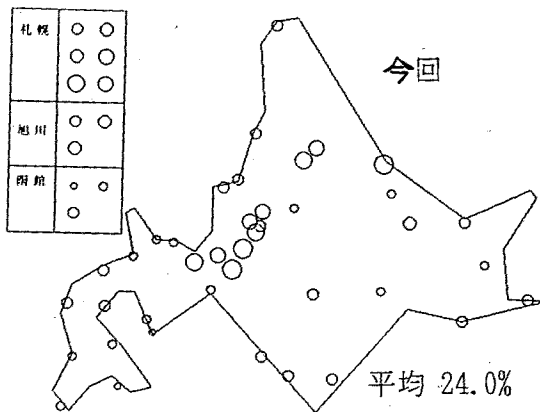
札幌	● ● ●
旭川	● ●
函館	● ●



☒28 【C2】 じゃがいもを「ゴシヨイモ」と言う



札幌	○ ○ ○ ○
旭川	○ ○ ○
函館	○ ○



札幌	○ ○ ○
旭川	○ ○ ○
函館	○ ○

☒29 【D1】 念をおす  
言い方の「行クシヨ」

☒30 【D2】 <さようなら>  
の意味で「シタツケ」